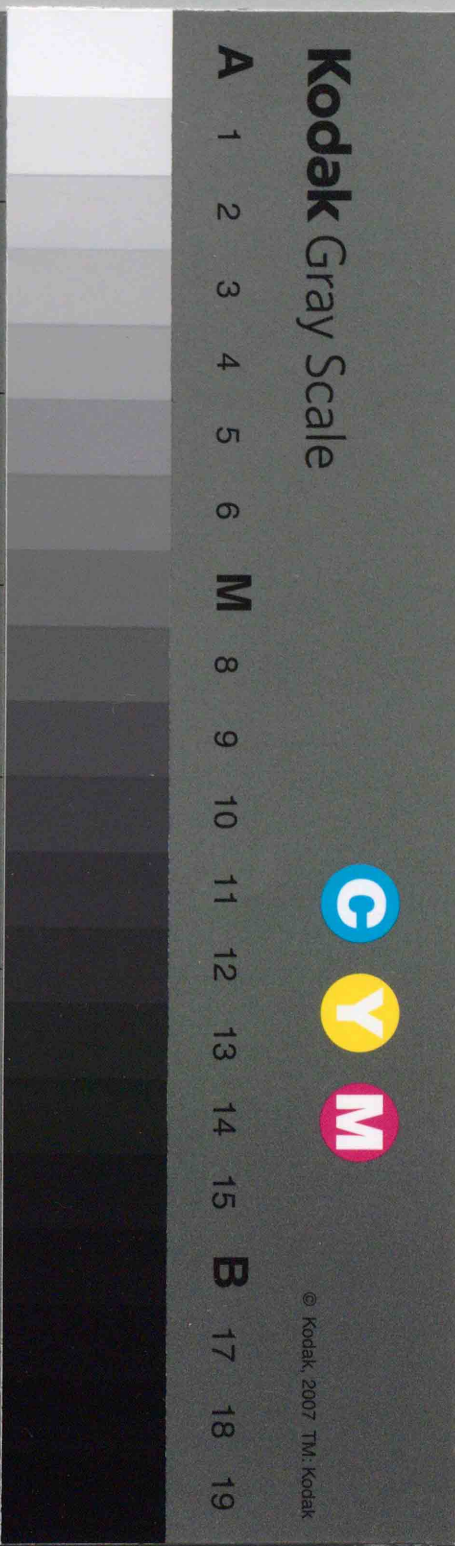
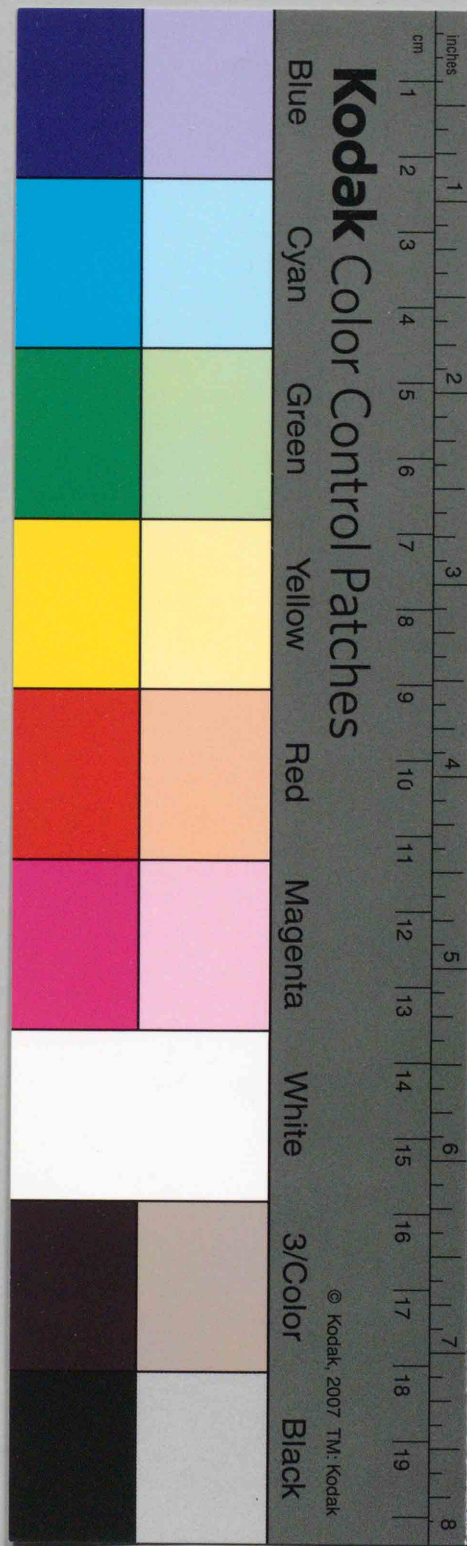


國民道德教科書 卷三

375.9  
Ha7  
資料室



40597

教科書文庫

4  
110  
44-1918  
2000  
302539

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

資料室  
日六十二月二十年七正大  
濟定檢省部文

375-9  
Ha7

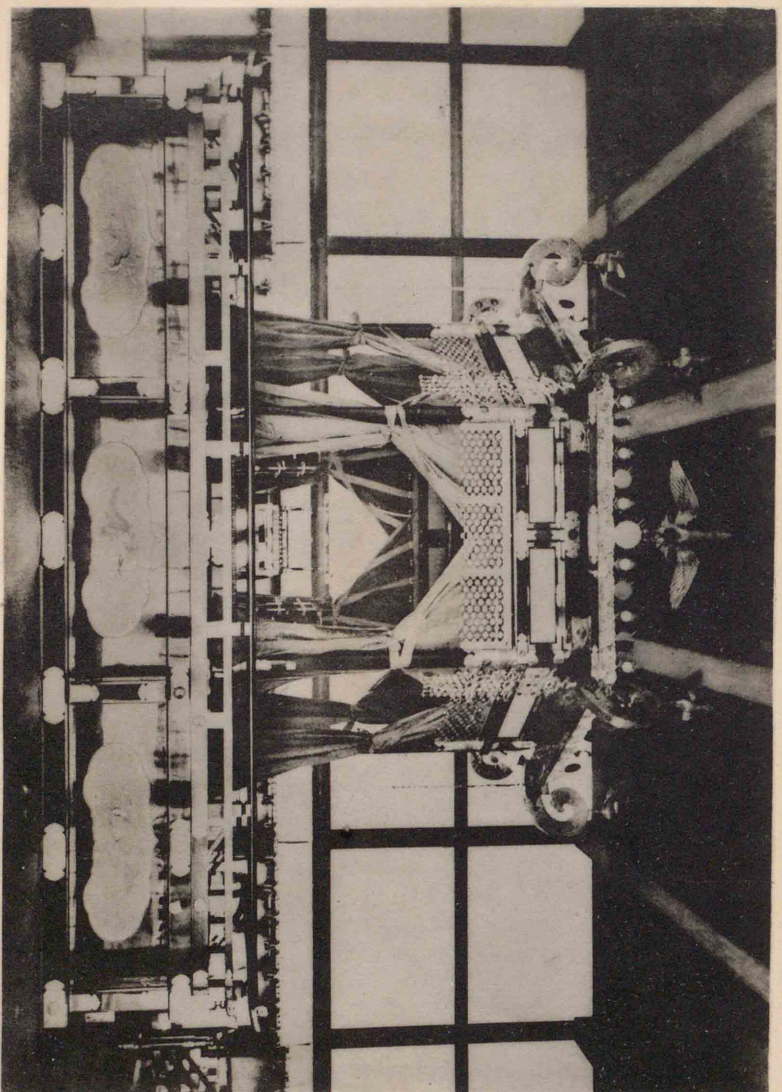
文學博士芳賀矢一編述



國民道德教科書

東京  
大學  
圖書

富山房藏版



高御座

勅語

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ  
樹ツルコト深厚ナリ我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億  
兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國  
體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス爾臣民  
父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉  
己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ  
智能ヲ啓發シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ  
開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義  
勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ是ノ

如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラス又以テ  
爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン  
斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民  
ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ  
中外ニ施シテ悖ラス朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ  
咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治二十三年十月三十日

## 御名御璽

### 詔書

朕惟フニ方今人文日ニ就リ月ニ將ミ東西相倚リ彼  
此相濟シ以テ其ノ福利ヲ共ニス朕ハ爰ニ益國交ヲ  
修メ友義ヲ悖シ列國ト與ニ永ク其ノ慶ニ賴ラムコ  
トヲ期ス顧ミルニ日進ノ大勢ニ伴ヒ文明ノ惠澤ヲ  
共ニセムトスル固ヨリ内國運ノ發展ニ須ツ戰後日  
尙淺ク庶政益更張ヲ要ス宜ク上下心ヲ一ニシ忠實  
業ニ服シ勤儉產ヲ治メ惟レ信惟レ義醇厚俗ヲ成シ  
華ヲ去リ實ニ就キ荒怠相誡メ自彊息マサルヘシ  
抑我カ神聖ナル祖宗ノ遺訓ト我カ光輝アル國史ノ

成跡トハ炳トシテ日星ノ如シ寔ニ克ク恪守シ淬礪  
ノ誠ヲ輸サハ國運發展ノ本近ク斯ニ在リ朕ハ方今  
ノ世局ニ處シ我カ忠良ナル臣民ノ協翼ニ倚藉シテ  
維新ノ皇猷ヲ恢弘シ祖宗ノ威徳ヲ對揚セムコトヲ  
庶幾フ爾臣民其レ克ク朕カ旨ヲ體セヨ

### 御名御璽

明治四十一年十月十三日

内閣總理大臣侯爵 桂 太郎

## 國民道德教科書 卷三

第三學年 皇室と國民

### 目次

- 一 世界の最舊帝國……………一
- 二 建國の昔……………八
- 三 オホミタカラ……………一六
- 四 神祇の尊崇……………二三
- 五 官國幣社……………二九
- 六 敬神のこと……………三六

本居宣長……………三六

七 支那思想と皇室……………四

八 鎮護國家の佛教……………四

九 列聖の御仁慈……………五

一〇 みやび……………六

一一 君臣の歌……………七

一二 列聖の御撰述……………七

一三 明治天皇……………八

一四 萬民を綏撫し給ふこと……………八  
久米幹文……………八

一五 國民の至情……………九

一六 乃木大將……………九

一七 富國強兵に就いて……………乃木希典……………一四

一八 國文學と皇室……………本居宣長……………一九

一九 物のあはれ……………二三

二〇 やまと心……………二〇

國民道德教科書卷三目次終

帝國大學  
圖書印

國民道德教科書 卷三

第三學年 皇室と國民

世界之最舊帝國  
 源親房卿が、神皇正統記に、  
 唯我が國のみ天地開けし始より今の世の今  
 日に至るまで、日嗣をうけ給ふことよこしま  
 ならず、一種姓の中におきても、自ら傍より傳  
 へ給ひしすら、なほ正に歸る道ありてぞ、たも

正統記



ちましくける。これ併しながら神明の御誓  
あらたにして、餘國に異なるべきいはれなり。  
と書かれたのは、今より約五百八十年以前で、親房  
卿は東洋の國々の歴史をこそ知られたれ、世界各  
國の様子は全く知られなかつたのである。今日世  
界交通の世の中となつて、諸外國の歴史の知り得  
られるやうになつても、この言は依然動かぬので  
ある。萬世一系の天皇上にいまして、千古不易の臣  
民下に仕へ奉ることとは、世界各國に全く類例の無  
いことである。國史の上に多少の波瀾はあり、武家

の跳梁した時代には、皇室の式微と申すべき時代  
もあつたが、八田知紀大人が歌つたやうに、  
いくそ度かき濁してもすみ返る  
水や皇國のすがたなるらん  
で、波瀾が一たび静れば、又今のやうな清澄濁りの  
無い大御世となるのである。  
凡そ世界の國々を見渡しても、我が國ほどの舊  
國は無い。支那の國は數年前までは、世界の最舊帝  
國と稱せられた。成程舊國には相違無い。しかし唯  
舊いといふばかりで、二十何回も帝室が更代した。

支那帝國

支那人種では無い他の民族が、金とか、元とか、清とかいふ朝廷を立てた。幾度か他人種に征服せられた帝國は、幾度か斷絶し復興したのである。殊に近年の革命では、君主國から民主國に代つてしまつた。支那は全く革命を繰返した國である。

諸外國

又まして歐米各國の歴史は王室と人民の争の繰返された記録で、中にも英王のチャールズ二世、佛王のルイ十六世など斷頭臺の露と消えた悲惨な歴史は、日本人の夢にも考へ及ばぬことである。それ故今の王室は皆新しい。現在の英國皇室はハノ

ーヴァ家といつて、一七一四年に即位したジョージ一世から始つてゐる。奧國皇帝は一八〇六年にフランシス一世が始めて帝と稱したので、獨逸帝國の建設は一八七〇年即ち明治三年の事であつたが、いづれも亡びた。普魯西王は二百餘年前、赤穂義士夜討の前年、始めて王位に即いたのであつた。伊太利王國も一八六〇年ウキットリオ・エマヌエール二世が始めて伊太利統一の事業を舉げて伊太利王となつたのである。露西亞前帝の家はロマノフ家といつて、一六一三年にハイル・フェオドロウ

キツチが始めて帝位に即いたので、ピーター大帝などといふ英主もあつたが、全露の皇帝ニコラス二世もあはれ今回の革命で、弑殺せられたところとである。かういふ諸國の歴史を見渡すと、親房卿の言はれたやうに、我が帝國はどうしても餘國と異なつたいはれがあるやうに思はれる。とにかく世界中の最も舊い國であることは疑が無い。親房卿が正統記を書かれた時分には、伊太利王室も、さきの普魯西王室も、乃至は奧太利王室も、皆普通の人民の列に居つたのである。

我が國が諸外國に異なるいはれは何か。それは前にも述べた通り、我が建國の由來が自ら別であるのに起因し、皇室と國民が、義ハ君臣ニシテ情ハ父子であるといふ親密な關係によつて結び付けられて居るからである。我等は萬世一系の事實を誇るに先だちて、其の事實の成立ち得た原因を知らなければならぬ。天照大神が、

「これ吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫宜しく就いて治むべし。寶祚の隆なるは當に天壤と窮りなかるべきものぞ。」

秦

と仰せられた神勅のつゆ違はず、眞に他の諸國には比類の無い國史を成し得た理由を知らなければならぬ。

昔支那の秦の始皇は六國を平げて皇帝となり、自ら始皇と稱して萬世に至らせようと宣言した。併し全くの空想に過ぎず、僅かに二世にして漢に亡されたのであつた。彼と此と比較にならない原因を知らなければならぬ。

二 建國の昔

天照大神

古典によつて皇祖天照大神の御事蹟を察するに、賢明透徹にして、極めて御徳が高かつたのである。さうして極めて溫柔玉の如き性質でいらせられたのである。躬ら天の長田狹田を作らせ給ふとあるから、人民と同じく耕耨の業にさへお盡しになつたのである。齊機殿（いぢまど）に入つて機を織らせられた事も見えるから、機業をさへおいそしみになつたのである。尊貴の御身を以て、かく下民と同じく農工業をも親らせられたのである。又かの新嘗をお營みになつたのを見ても、如何に下民の勞苦に

素盞鳴尊

御同情遊ばされ、且下民の幸福に懸念せさせられたか、うか、はれる。御弟の素盞鳴神が亂暴をあぐまでも忍耐遊ばされ、寛恕遊ばされたことを見ても、その美しい御性質は拜察せられる。併し素盞鳴尊が天上に上り來ますと聞かせられて、男装して弓矢を手挟み、國を奪ふ黒き心あらば許さじ。と決心遊ばされた御氣勢に、十分な御勇氣も見えるのである。これらを総合して考へれば、大神は實に我が日本國民の理想とも見るべき大神であらせられたのである。溫和で、勤勉で、一大事變に際して

瓊々杵尊

は毅然たる勇武、一步も退かない氣象があらせられたのである。

皇孫瓊々杵尊は、大神の命によつて我が國に降臨せられ、それから三代の間は筑紫に都せられたので、我が日本帝國は實に瓊々杵尊に始つたのである。瓊々杵尊から第四代目の神日本磐余彦尊即ち神武天皇に至つて、始めて大和國に都せられて、皇威が廣く四方に及んだので、此の天皇からを人皇の世と稱し、此の天皇の御即位の年を我が紀元第一年と數へるのである。昔の人の歌に、瓊々杵尊

すべらぎ

をば、

久方の、天の戸開き高千穂の峰に天降りしす  
べらぎ。

といひ、神武天皇をば、

秋津洲、大和の國の樞原の、畝火の宮に宮柱、太  
知り立て、天の下、知らしめしけるすべらぎ。  
と稱へて居る。同じくすべらぎと申し上げて居る  
のを見ても、我が國が瓊々杵尊に始つて居ること  
を知らねばならぬ。

建國創業の君であらせられた瓊々杵尊にして

やはす

も、神武天皇にしても、常に天照大神の御教を守つ  
て、其の聖徳を以て人民を感化せられたことは、古  
典に考へて知られることである。外國の歴史に見  
えるやうに、單に武力一片で暴壓的に服従せしめ  
たのでは無かつたのである。不逞の徒で、皇師にさ  
からふものはあつた。それを古典にはまつるはぬ  
ものと言つてゐる。そのまつるはぬものを平定せ  
られることをやはすと言つてある。やはすは和か  
にするこゝとで、これまで頑強に我意を張つて勅命  
を奉じなかつたものの心を和げて、心底から歸順

ことむく

させるのである。又ことむくといふ語もある。ことむくは言を以て諭して、從來他の方面に向つてゐたものを、こちらへ向かせることである。これらの語を考へて見ても、我が創業の君が、如何に仁慈を以て、徳治を以て、不逞の徒をも心服せしめられ、慰撫せられたか、察せられるので、決して無理に力ばかりでおさへられたのでは無い。これが即ち大神の大御心で、列聖は常にこの大御心をお繼承遊ばされたのである。

御民  
牧民

支那には御民ごみんといふ語もあり、牧民といふ語も

知らしめす

ある。人民を馬や牛に譬へたのである。君主専制の意味がこの語の上にも歴然としてゐる。我が國には決してかういふ語は無い。すべらぎはすべてを統べる義で、すべらぎ即ち天皇が國を治り給ふことを御世知らしめす。といふ。知らしめすは、お知りなさる。といふ意味である。よく下民の事情を知るといふことである。かく下情に通じて、始めて仁慈の政が行はれるのである。まつるはぬものに對しては之をやはし、之をことむけ、さて人民をばおしなべて知らしめしたのである。

三 オホミタカラ

天孫に随つて降臨したものの、神武天皇に随つて大和へ來たものは、もとより忠誠無二であつた。かのまつろはぬものどもも、至仁の化に浴して歸順した。神武天皇に敵對した大和の長髓彦がなかなか頑強であつたため、饒速日命は遂に之を斬つて、降參せられた。神武天皇は直ちに饒速日命の御子可美真手命をして、宮門を衛らしめられた。今日の語で言へば、直ちに之を近衛師團長に補せられた

可美真手命

やうなわけである。今まで敵對したものに對しての此の御信任、何人が感激しないものがあらう。神武天皇の寛弘の度量は、實に其の大業を成された所以である。

天日の萬物を照臨する厚德を以て、代々の天皇は一視同仁に臣民をめぐませられたので、臣民は皆感激して、明き淨き心の忠節をちかつた。一度は反抗し奉つたものも、心の底から歸服した。外國から歸化した蕃別も、代々を経て、日本民族に同化して、すめらみことを我が大君と稱へ、大家の父と仰



ぎ、現つ御神と尊んだ。仁者に敵するものはどこにも無いのである。

歴代の天皇が一年中の祭祀に於ても、ひたすら國利民福の爲に祈られたことは、前學年に學んだ通りである。農業を本とした國であるから、殊に年の豊凶には懸念せられたのであらう。農民を重んぜられた思想は武家時代にも残つて居つて、士農工商といふ國民の區別を立て、も、農は士に次ぐものと見做されたのである。

崇神天皇の六十二年の詔に、農は天下の大本な

り。民の恃んで生くる所なり。と仰せられて、依網池、荊阪池を作らせられたことが見え、垂仁天皇の三十五年に高石池、茅渟池、狹城池、迹見池を始として、諸國に八百ばかりの池を作らせられたことが見える。仁徳天皇の十四年には大溝を掘り石河の水を引いて、鈴鹿、豊浦の郊原に灌漑して、四萬餘頃の田を得たとある。後には池溝を掘る爲に、三韓の歸化人を使用せられたこともある。又雄略天皇の御代には諸國に桑を植ゑさせられ、皇后も蠶事を親らなされたのである。かやうに農事を御奨勵遊ば

オホミタカラ

されたので、耕地は年々に開けて、五穀もよく實のり、國民は鼓腹して、太平を楽しんだのである。國民一般を昔からオホミタカラと稱せられた。即ち大御寶である。家の中で父母が子供等を子寶と考へたやうに、大家に於ては國民一同を國の寶とお考へ遊ばされたのである。義ハ君臣ニシテ情ハ父子の親愛があるので、人民を牛や馬に比べたのとは雲泥の相違がある。

國民が農を貴び穀物を重んずる風は、かの餅の的の傳説に於ても認められる。小學讀本にも出て

餅の的の傳説

餅

ある話で、或物持が鏡餅を的として矢を射て遊んだ處、その餅は忽ち白鳥と化して飛去つて、其の後其の人の田には稻がそだたなかつたといふのである。昔はいたゞき餅もちといふ儀式もあつた。冠婚葬祭の如何なる場合にも餅をついたり、赤飯をたいたりして、特殊な事件を記念するのは、今日も行はれてゐる風習である。正月の餅飾も昔のまゝである。百姓が粒々辛苦の苦勞を思つて、一粒でも飯を粗末にするなといふ誠は、良家の父母が常に子弟に訓へる所である。佛教を貴んだ時代には、米を菩

薩と呼んだりした。かやうに米穀を貴んだ風習は、同時に他の物をも大切に作る心を養つて、自ら質素儉約の美風を成したのである。

朝廷でも農事を重んぜられるから、人民も亦米穀を重んじ、人民が米穀を重んずるから、朝廷でも殊に農業を重んぜられた。上の爲す所、下の欲する所と全く一致して居る。我が歴代の天皇の御政は、常にかくの如く、民意のある所を察して、即ち民の心を本として、仁政を行はせられたのである。かくしてオホミタカラをはぐくみいたはり、皇御國を

民を本とす

知ろしめしたのである。

#### 四 神祇の尊崇

神武天皇

崇神天皇

神武天皇は、大和國橿原に宮作して御即位あらせられた年、天神地祇を鳥見山に祭つて、祖先尊崇の大義を明らかにせられた。歴代の天皇も常にこの事に御心を注がせられて、今の世に至るまで變りはない。天照大神が皇孫にお授けになつた神鏡は、はじめは宮中に床を同じうして安置せられたが、それは神威を瀆すの虞があるといふので、崇神

天皇の御代には、始めて之を大和國笠縫邑に祭らせられ、次の御代垂仁天皇の御時に、今の伊勢の五十鈴川の上にお祭りになつたのである。聖徳太子は外國文明を我が國へ輸入して、我が國の進歩をお圖りになり、大いに佛教の興隆に御盡力になつたが、推古天皇の十五年には、文武百官とともに神祇を拜して、神祇崇敬の道を明らかにせられた。即ち神祇を祭るのは、信仰と何等矛盾扞格するもので無いことを示されたのである。爾來佛教の方では、だんく、神道に近づいて來て、神佛混淆といふ姿

神佛混淆

になつたが、これは一面に於て、神祇尊崇の國民の信念が、如何に牢かたいものであるかを證明するのである。如何に偉大な宗教の力を以てしても、國民の神祇尊敬の念を、根本から拔取つてしまふことは出来なかつたのである。佛教を流布するに力めた高僧達にしても、やはり日本國民であるから、國民の信念を離れることは出来なかつたのであらう。それ故佛教が大いに興隆して、堂塔伽藍が到る處に聳えるやうになつても、神社は神社で、昔のまゝの崇敬を受けたのである。

高僧

産土神の郷社村社が丘陵森林の間に隠見して、日本國體の特色を語つてゐるのも之が爲で、西洋各國などでは、耶蘇教の傳播と共に、かういふ古來の歴史的記念物は全く一掃せられたのである。光仁天皇の寶龜三年の記事に、大和國西大寺の西の塔に雷が落ちた。之を卜つて見ると、近江國滋賀郡小野神社の境内の木を切つて、この塔を構へたので、その神の祟であると分つたと書いてある。かういふ話は佛教興隆の時代に於ても、國民の敬神思想が如何に熾盛であつたかを證明するものである。

である。

神宮

齋宮の忌詞

昔は、神宮へは僧侶の參詣を禁じた。それ故無髪むみのものは、わざくちん丁髷まげを載せて參詣したといふことである。神宮に奉仕せられる齋宮には、齋宮の忌詞といつて、僧を髮長、佛經を染紙、佛を中子などといつた。佛教に關したことを言葉に出すことをさへ、神域を汚すとして憚つたのである。

國家の大事ある毎に、神にも佛にも祈請せられるのが常であつたが、かの蒙古來寇の場合には、天皇は身を以て國難に代らうと伊勢神宮にお祈り

神風

になつた。これまでの歴史には龜山上皇とあつたが、新しい史料の發見で、上皇も天皇もお祈りになつたことが分つた。さうして大風が吹起つて、蒙古の船がさんぐに打破られた時、國民は之を神風と唱へた。神國を外難から救つた風で、祖宗の神靈の吹起された神風と信じたのである。決して之を佛風とは言はなかつた。

熱田の御劍

熱田神宮の御劍を僧某といふものが盗出して、朝鮮へ渡らうとしたが、途中大暴風で引返して、遂に其の意を果さなかつたといふ傳説がある。これ

は歴史上の事實ではあるまいが、かういふ傳説の生ずるのを見ても、神國の威靈を尊んで、佛家を卑しとする國民思想の一端が窺はれる。

維新前後からは神佛が全く分離した。宮中の祭祀儀式には一切佛式をお用ひにならぬこととなり、佛敎は宗教として民間の自由の信仰に委せられた。

### 五 官國幣社

佛敎や、耶蘇敎や、其の他宗教神道は文部省の宗

教局で事務を取扱つて居るが、全國の官國幣社は、内務省の神社局で其の事務を取扱つて居る。宗教は人々の信仰の自由に任せてあるが、風教に關係があるから文部大臣の管轄に屬し、神社崇敬の事は國家行政の一部であるから、内務大臣の主管する所となつて居るのである。

官國幣社の數

官幣社、國幣社とも大中小の區別があつて、現在總數は百八十一、内譯は官幣大社が五十六、同中社が二十一、同小社が四、國幣社は大社が五、中社が四十七、小社が二十四である。例へば官幣大社多賀神

宮

社は伊弉諾神を奉祀し、官幣中社鎌倉宮は護良親王を奉祀し、國幣大社春日神社は天兒屋根命を奉祀し、同中社鶴岡八幡宮は應神天皇を奉祀してゐる類である。これ等の神社は祭神も顯著で、鎮座の時代も古く、古來の崇敬も篤いといふやうな種々な緣由から、全國の神社中、最も尊崇すべき神社として、國家の神社として崇敬せられるのである。何々宮といふのは多く天皇を御祀り申し上げたもので、例へば官幣大社の平安神宮は桓武天皇を奉祀し、氣比神宮は仲哀天皇を奉祀し、赤間宮は

別格官幣社

安徳天皇を奉祀し、吉野神宮は後醍醐天皇を奉祀する類である。外に別格官幣社といふのがある。楠木正成公を祭つた湊川神社、新田義貞公を祭つた藤島神社をはじめ、四條畷神社、結城神社、名和神社、豊國神社、東照宮など二十四社ある。維新前後の志士及び維新以來の戦死者を合祀せられてある靖國神社も別格官幣社の一つである。別格官幣社の祭神は、いづれも我が國家の爲に偉大な勳功を立てた人を祀つたもので、人臣であつても、國家に盡した功勞によつて神となつて國家の祭祀を受けるのである。

奉幣

官國幣社の例祭には、其の府縣の知事が奉幣使として幣帛を捧げるのであるが、官幣社の幣帛は御内帑から支出せられ、國幣社の幣帛は國庫から支出することになつて居る。

官國幣社の祭神中には、餘りに其の由緒が古くて、我が國の歴史から見て、どの神を祭つたのか不明なものもある。不明な神祇に禮拜するのは意味が無いなどといふ人もあるが、これは我が國の祖先を尊び、神祇を重んずる風を知らず、唯理窟から論



ずる人である。今日に於ては不明であつても、鎮座の當時、又は其の後も明白であつたればこそ、崇敬が加つたに相違無い。それ故我等は祖先の跡を追うて尊崇すればよいのである。祖先の崇敬したものを崇敬するのに、何の理由も詮議立もいらぬ。

神社に参拜して何を祈るか。神社は私の願望を願ふ所では無い。國家の守護神であつて、日本國を護り、日本國民を護らせ給ふのである。神社に参つて我等の願ふべき事は、皇室の繁榮と國家の隆昌より外には無い。我等國民は「明き淨き心」の至誠を

何を祈願するか

以て、唯それを祈願すべきである。敬神即忠君といふのはこの意味である。

至尊におかせられては、伊勢神宮をはじめ、全國の神社に對しては臣民の幸福、國家の繁榮をのみお祈りになるのである。下は上の爲に祈り、上は下の爲に祈る。こゝに於て國家の神社としての意義がある。何等私の爲に祈らぬ所に、宗教と異なる點があるのである。後宇多天皇の御製に、

天つ神國つ社を祝ひてぞ

わがあし原の國はをさまる

府縣社、郷社、村社、無格社をも合せれば、全國の神社の數は十一萬八千九百餘にも及んでゐる。社格に種々の區別があつても、我等が尊崇の念には何等の差別は無い。

〔六〕 敬神のこと

本居宣長

今の世の人、神の御社はさびしく物さびたるを尊しと思ふは、いにしへ神社の盛なりし世の様をば知らずして、たゞ今の世に、大方古く尊き神社どもはいみじく衰へて荒れたるを見馴れて、古く尊

き神社は、もとよりかくあるものと心得たるからのひが事なり。

伊勢の大御神の宮殿みやの茅葺ちやぢなるを、後世に質素を示す戒なりと、近き世の神道者といふものなどのいふなるは、例の漢意かんいにへつらひたるうるさきひが事なり。質素を尊むべきも事にこそよれ、すべて神の御事に、質素をよきにすること更に無し。御殿みやのみならず、獻る物なども、何も力の堪へたらん限りうるはしく、いかめしく、めでたくするこそ、神を敬ひ奉るにはあれ。御殿また獻り物などを質素

にするは、禮無く、志淺きしわざなり。抑、伊勢の大宮の御殿の茅葺なるは、上つ世のよそひを重みし守りて變へたまはざるものなり。しかして茅葺ながらに、其のいかめしきことの世にたくひ無きは、皇御孫命の大御神を厚く尊み敬ひたてまつりたまふが故なり。さるを御みづからの宮殿をうるはしくものしたまひて、大御神の宮殿をしも質素にしたまふべき由あらめやは。すべて近き世に神道者のいふことは、皆からごゝろにして、古の意に背けりと知るべし。

古き神社どもには、いかなる神を祭れるにか知られぬぞ多かる。神名帳にも、すべて祭れる神の御名は記されず、たゞ社號（じごう）のみを舉げられたり。出雲風土記の神社をしるせるやうも同じことなり。社號すなはち其の神の御名なれば、さもあるべきことにて、古はさしも祭る神をば、強ひては知らずとも有りけん。然るを後の世には、必ず祭る神を知らずはあるまじきことのごと心得て、知られぬをも強ひて知らんとするから、よろづにもとめて、或は社號につきて、神代のふみに聊も似寄れる神の名あ

れば、おしあてに其の神と定めたる類多ければ、其の社に傳へたる説も信じ難きぞ多かる。抑、神は八百萬の神など申して、天にも地にも其の數限り無くおはしますことなれば、天の下の社々には、其の中のいづれの神を祭れるも知るべからぬぞ多かるべき。神代紀などに出てたる神は、その千萬の中の一つにも足らざるを、必ず其の中にて其の神と定めんとするは、八百萬の神の御名は、神代紀にことごとく出てたりと思ふにや。古書に御名の出でざる神の多かることを、思ひわきまへざるはい

かにぞや。さばもとより、某神といふ古きつたへの無きを、強ひて後に考へて、あらぬ神に定めんは、なかなかのひがごとなり。もし其の社號によりて定めんとせば、例へば伊勢の大神宮は五十鈴宮と申せば、祭る神は五十鈴姫命にて鈴の神、外宮はわたらひの宮と申せば、綿津見神にて海神なりとせんか。近き世にもものしり人の考へて定むるは、大方これに似たるものにて、いと浮きたることのみなれば、すべて信じがたし。知られぬを強ひてもとめて、あらぬ神となさんよりは、たゞ其の社の號を神の

御名としてあらんこそ、いにしへの意なるべきを、社の號のみにてはとらへ所無きがごとと思ふは、近き世の俗の心にこそあれ。今の世とても、世に廣くいひならへる社號は、そもやがて神の御名と心得居て、八幡宮、春日明神、稻荷明神などいへば、必ずしも其の神はいかなる神ぞとまでは尋ねず、たゞ八幡、春日、稻荷にてあるにあらずや。諸の社もみな同じことにて、社號すなはち其の神の御名なるものをや。

### 七 支那思想と皇室

日本が三韓や隋唐と交通する時代には、それらの國の文明の程度が日本よりも高かつた。それ故その文明を入れて、日本の國運を進歩させようと、いふのが、當時の爲政者の努力であつた。こゝに於て儒教も採られ、佛法も導き入れられた。

支那の國體は日本とは異なつてゐる。支那は革命を繰返して居る國である。勢力あり、徳望ある者が人民中から出て、帝王と稱する國である。さうしてその子孫に至つて、勢力が衰へ、人望を失ふと、他

外國文明の輸入

支那の國體

天子

人が又取つて代る國である。我が國のやうに、皇祖天照大神の宣はせられた神勅が國民間に永久に守られ、永久に行はれて行く國では無いのである。それで支那の聖人賢人は、自國の思想を根據として、その國體に應じて道を説いて、天子は天の子である。天に代つて人民を治める者である。故に天子が有徳で無ければ、人民を治める資格が無い。無徳なれば天の命が革つて、別な人が天子になつてよい。天子はあくまでも人民の模範となる覺悟で、其の身の徳を正しうし、仁政を施さねばならぬと説

天皇

いた。天子の政が悪ければ陰陽も度を失して天變地異も起り、種々の災難も起ると信じたのである。日本の天皇は皇祖大神の神勅のまに、代々父と仰がれ、神と尊ばれたまひて、仁政を行はせられて來たのである。支那の聖賢の言を待たず、自ら道徳を高くして、民の模範を示して居られたのである。臣民は誰一人皇室に對して不平を言ふものは無かつたのである。上も下も祖先の教を守つて、大家も小家も連綿として相繼いで行つたのである。革命などといふ語も考も、毛頭無いのである。

支那人の思想に接しても、臣民は何等思想上の動搖は受けなかつた。祖先の遺訓はその思想よりも一層鞏固に國民の心に染んでゐたに相違ない。然るにいやが上にも仁慈であり、謙讓であらせられる皇室に於ては、この支那人の思想に接して、一層自ら御謙抑をお加へになつた。不文不言で行はれて居つた孝信友悌といふやうな徳を人民に教訓へになると同時に、皇室に於ては、一層政事に越度は無いが、天の心には背いては居らぬかと常に御反省になつた。人民の方からは何とも申し上げ

宣命

ないのに、皇室の方から、進んで支那人の思想をお採りになつて、いやが上にも仁政を布く事に御骨折りになつた。文武天皇御即位の時に宣はせられたのを始めとして、代々の天皇の御即位の宣命には、今この大業を受けて、果して天地の心に合ふや否や、退くも知らず、進むも知らず、といふ御趣意を宣はせられていらせられる。明治天皇御即位の宣命にも同じやうな仰言があつた。何たる御謙徳であらう。日本の國體では天つ日嗣のつきと受け給ふは當然の事で、毫もかゝる御心配はいらぬの

御謙徳

である。その外天下に大赦するとか、門閭に旌表するとか、支那に行はれて居つた善事と見れば、一々御採用になつた。從來惟神の道によつて施された仁政の上に、更に支那の教を加へて、一層の仁政を布かせられたのである。臣民は益感激して、君臣の關係は益親密になつた。道德の本源が皇室にあるといふことが、いよく明白に表現せられた。

#### 八 鎮護國家の佛教

佛教は皇室の保護の下に、世を経るに隨つて傳

播した。併しそれが固有の神祇崇敬の信念を打壊すことは出来なかつた。聖徳太子は已に崇神と信佛との矛盾せぬ範例を示され、國民も佛教を信じつゝ、神祇の尊敬を忘れなかつたことは前にも述べた通りである。

朝廷に於て佛法を興隆せられたのも、實は之によつて國利民福を増進しようといふ御趣意に外ならなかつた。上皇御不豫、皇太后御惱といふやうな場合、天下に大赦があるといふやうな時には、寫經、造寺、建塔、度僧といふ事を行つて、孝道の模範を



大慈悲

示されたのみならず、國家の大事には神祇を祭ると同時に、佛寺に供養して、國家の安寧をお祈りになつた。雨につけ、旱につけ、天下公民の爲にお祈りになつたのである。從來の祭祀の外に、更に佛法をお加へになつたのである。佛教に説く大慈悲は、我が皇室の大慈悲となつてあらはれたのである。

國分寺

聖武天皇は東大寺を奈良の都に建立せられ、又全國に國分寺を置かせられたが、その時の勅語に、古の明主は皆先業を能くして國泰らかに、人樂しみ、災除き、福至る。何の政化を修めて、能く此の

道をいたさん。頃日年穀豊らず、疫癘頻りに至る。慙懼交、集りて、唯勞して己を罪す。是を以て廣く蒼生の爲に遍く景福を求む。故に前年驛を馳せて天下の神宮を増飾す。去歲普く天下をして釋迦牟尼佛の尊金像高さ一丈六尺の者各一鋪を造り、並びに大般若經各一部を寫さしむ。云々佛教を尊ばれたのは全く國家人民の利益を思はせられたからである。國家鎮護といふことが主眼であつたのである。

比叡山に延曆寺を創建した傳教大師、高野山に

東寺

金剛峰寺を開いた弘法大師等の高僧達も、皆王城鎮護、國家鎮護の爲に寵遇せられたのである。就中東寺は桓武天皇が國家鎮護の爲に建立せられたので、嵯峨天皇は之を弘法大師に賜はつて、永く國家鎮護の靈場となつた。弘法大師は又宮中に眞言院を置くことを許されて、後には宮中に後七日の御修法を行ふことになつた。其の他種々の齋會も常例となつて、宮中に行はれることになつて、或場合には宮中全部を開放して、全く佛會の爲に用ひた事もあつた。かやうな種々の修法も、加持祈禱も、

個人としての安慰を得る爲では無くして、國家の爲の加持祈禱であつた。仁王會では仁王經を讀誦するのであるが、この仁王經は即ち帝王の行爲に就いて述べた經文である。

奈良平安時代の歴史を見て、皇室が佛教を重んぜられたことを面白からぬやうに言ふ人も多い。佛教の隆盛につれて、弊害も伴なひ、外來の教の爲に、固有の國風が紊された事も少くないが、朝廷本來の御趣意は、之を以て國民の蒙を啓き、又之によつて國民の幸福を増進しようといふ點にあつた。

事を記憶し、肝銘しなければならぬ。

あまりに朝廷の御眷遇が厚かつた爲に、はては朝恩に狃れた僧兵の大衆が皇室の累となり、後白河法皇が、意の儘にならぬのは加茂川の水と、双六の賽と、山法師である。と仰せられるに至つたのは、眞に恐多い事であつた。

佛教の慈悲を本として、歴代の皇后が人民の慈惠事業にお盡しになつたことも、外教を御善用になつた一例である。奈良朝の昔に於て已に施薬院、悲田院の建てられたことは歴史に明らかな事實

山法師

である。施薬院は今日の慈惠病院、悲田院は今日の養育院に外ならぬ。個人としても、和氣清麿の姉法均尼の如く、孤兒を多く養つた人もある。小野岑守は續命院といふものを筑紫に立てた。

### 九 列聖の御仁慈

仁徳天皇が「民の富は朕の富なり。」と仰せられ、皇室の雨漏をさへお忍びになつたこと、醍醐天皇や一條天皇が寒夜に御衣を脱して、民の困苦に御同情あらせられたこと、醍醐天皇が左大臣時平と御

相談になつて、華奢な風をお戒めになつたことなどは、人のよく知つて居る話である。これ等は皆身を以て徳行の模範をお示しになつたのである。天皇の大御心にはあくまでも皇祖皇宗の御仁慈を受繼いで、人民を子の如く恵み給ふといふより外は無かつたので、外國の歴史を讀んで、國王が絶えず國民と利慾の争から紛擾を起して居るのに比べて見ると、かくまでも我が國の歴史とは違ふものかと、驚かれるのである。試みに古代、中世の英國史の一頁を繙き見よ。國王が殞落すれば、繼承者は

直ちにその大藏省へ駈付けて、金銀財寶を沒收し、それから即位式を行ふ。さて出来るだけ收斂を重くして人民を苦しめる。人民は怒つて暴動するといふやうな事を、幾度もくゝ繰返して居るのである。王者に道德の模範たる資格も無いし、王室と人民は常に仇敵である。

倫敦塔

倫敦塔には英國即位式に用ひられた王冠その他のものを藏めてある。金剛石の光、黄金の色は目もまばゆい程であるが、同じ塔の中には某の女王、某の公侯を幽閉したり、死刑に處したりした跡が

残つてゐる。見るも恐ろしい刑具の大斧もそのま  
まに残つてゐる。英國の歴史はこゝに物語られて  
居るので、見るものをして慄然として恐怖の念を  
起さしめる。

新發見の史料

列聖が臣民をあはれませられた數々の例は、國  
史の上にも見えて居るが、近年新しく發見した史  
料においても、隠れた事實がだん／＼あらはれて  
來る。明治三十一年醍醐三寶院で、後奈良天皇宸筆  
の心經が發見せられた。これは天文九年にお書き  
になつたものであるが、此の時代は、中國では尼子

氏と毛利氏が争つて居り、京都では細川、三好兩黨  
が相せめいで居るといふ戰國時代であつたが、天  
文八年には京畿から中國、九州、關東、奥羽までも大  
洪水があり、氣候も順適で無く、一般に凶作であつ  
た。それ故明くる天文九年には飢饉の慘狀を呈す  
るに至つた。京都のみでも貧人の斃れるものは毎  
日六十人を下らなかつたといふ有様であつた。又  
疫病もそれに伴なつて流行した。

そこで伊勢兩宮にも御祈禱になり、又天文とい  
ふ年號を改めて災厄を禳はせようといふ内旨も

あつたのであるが、當時皇室式微の最も甚だしい時で、その費用さへも無かつたのである。そこで天皇は御窮迫の中から、この心經を金字に寫させられて、日本六十六國にお下しになつたので、同様なものが諸國から追々發見せられた。その奥書には、今茲天下大疫。萬民外阡於死亡。朕爲民父母。德不能覆。甚自痛焉。竊寫般若心經一卷於金字。使義堯僧正供養之。庶幾瘳爲疾病之妙藥矣。とある。民の疾苦を救ふ妙藥にもなれといふ御祈願である。

今上天皇陛下の御高祖父光格天皇から後櫻町上皇に上られた御消息、これは京都御所東山御文庫の中にある後櫻町天皇の御日記中にあるもので、二十餘通の御消息によつて、常に上皇の御健勝を祈らせられ、萬般の事に御注意を乞はせられる御孝養の至情と、御謙遜の美德を拜察せられるものであるが、其の中の一つには、

「人君は仁を本と致し候事古今和漢の書物にも數々有之。」

「仁惠を重んじ候はゞ、神明の冥加にもかなひい

よいよ天下泰平と畏れ入り参らせ候。  
「敬神正直仁惠を第一にいたし候へば、何事も安  
穩の道理に候へば、右の心得第一とのみ存じ参  
らせ候事にて候。」

などの御言葉がある。

歴代の天皇が御諱に仁の字をお用ひになるこ  
とも、この大御心に外ならぬかと恐察するのであ  
る。この大御心は古今を一貫してゐるのである。

「われを視るが如くせよ。」と仰せられた神鏡を齋  
き奉つて、常にその御心で、民をおいつくしみにな

御諱の仁の字

るから、君臣の親みは代々を重ねて、いよ／＼かた  
くなるのである。さうして天照大神の神勅が間違  
無く實行せられて居るのである。徳ヲ樹ツルコト  
深厚ナリ。との仰はこゝである。かくして世界に比  
類の無い日本の國家が益繁榮して行くのである。

炊煙起

頼山陽

煙未<sub>レ</sub>浮。 天皇愁。 煙已起。 天皇喜。 漏屋弊  
衣富<sub>レ</sub>赤子。 子富父貧無<sub>レ</sub>此理。 八洲縷々百萬  
煙。 簇擁皇統長接<sub>レ</sub>天。

一〇 みやび

延喜時代の歌人、凡河内躬恒は、

てる月を弓張としもいふことは

山邊をさしていればなりけり

の歌に、天皇の感賞を得た。武人て歌人であつた平忠盛の、

ありあけの月も明石の浦風に

波ばかりこそよるとみえしか

同じく武士で歌人の名手と稱へられた源三位頼

政の、

郭公名をも雲井に上ぐるかな

ゆみ張月の射るにまかせて

いづれも、時にとつての面目を雲井の空に施したのである。

一條天皇の御世に中將實方卿が一時の感情に激して、藤原行成卿の冠を打落したが、行成は少しも騒がず、笄を取出して冠を直した。天皇は御簾の隙から之を御覽になつて、行成は心優なるものである。實方は陸奥の歌枕見て參れ。とて陸奥へ遣は



されたとある。歌枕見て参れとの仰、何といふやさしいお詞であらう。高倉天皇の御代に、衛士が御苑の紅葉を焚いて、酒をくみかほした。天皇は「林間煖酒焚紅葉」と白樂天の句を誦して、風流な者よ。」と仰せられた。何といふ寛弘の御徳であらう。天平十八年正月雪の降積つた朝、橘諸兄以下が上皇の御宮に参つた時、おのゝ歌を作れとの仰、おもひおもひの作があつた中に、橘左大臣諸兄は、

降る雪のしら髪までに大君に

つかへ奉れば貴くもあるか

と歌つた。白髪のお老臣が、君恩を喜んだ有様が目に見えるやうで、君臣和樂の親みが思ひやられる。

南殿の花の宴を始として、雪のあした、月の夕、天皇が群臣を召して、詩歌、管絃の風流を盡させられたことは中古時代の常であつた。九月十三夜の後の月を賞する事は、宇多天皇の御世から始つたとか。まして南殿の花の宴、折々の舞樂の花やかさ、きらゝかさは想像するに餘りある。後醍醐天皇が吉野山に雲井櫻を御覽して、

こゝにても雲井の櫻咲きにけり

たゞかりそめの宿とおもふに

と仰せられた御雅懐は、聞く我等には悲憤の涙も添ふ心地がする。歴代の天皇が風雅韻致に富ませられ、殊に和歌に堪能でいらせられたことは、世界各國の帝室に例の無いことであらう。

和歌

和歌は我が國固有の文學で、上下幾千載の歴代の文學を縦に貫き、横に貫いて居るものである。漢文を主とし、漢詩を作る事の大に行はれた時代でも、和歌は固有の文學として常に行はれた。延喜時代に始めて古今集の勅撰があつてから、續いて

勅撰集

敷島の道

後撰、拾遺と鎌倉の始頃までには、八代勅撰集が、院宣或は勅命によつて出来上つた。承久の役の三上皇、後鳥羽、順徳、土御門は殊にこの道に堪能でいらせられた。敷島の道といふ名稱もこの頃から起つた。和歌を日本固有の道と稱へたのである。勅撰集の撰集があつた事は、朝廷と和歌に少からぬ關係を有せしめた。一首でも勅撰集に採られる事を非常な名譽と感じた。もとく古來の忠君心から出たのであるが、撰集に入つて、歌名を後世に傳へる事は、武人が戦場の功名よりも一層な名譽であ

平忠度

つた。平家の都落の際、平忠度が途中から引返して、夜千載集の撰者であつた俊成卿の門を叩いて、その歌集を託し、死後一首にても入選の榮を得しめ給へと頼んだのは有名な話である。俊成がその心を酌んで、読人知らずとして千載集に収めたのは、さゝ浪や志賀の都はあれにしを

むかしながらの山ざくら花

の歌であつた。勅撰集は二十一代集までを數へて、其の後は絶えたが、天皇をはじめ奉り、攝關以下公家の人々は代々皆歌の嗜があつた。皇室と和歌、實

に離るべからざる聯想がある。萬世一系の皇統、太古以來の文學、列聖の御歌、和歌に伴なふ歴代の佳話、これ等は皆我が國の古代を思念せしめるものである。百人一首の歌ガルタが、永く弘く國民の間に喜ばれるのも、こゝにその意義がある。

一たび古代の語に綴られた三十一文字の音響に觸れ、ば、思は遠く平安時代の昔に遡る。徳川時代に入つては、歌學の研究は進んで國學となつて、大いに忠君愛國の思想が鼓吹せられることとなつた。幕末勤王の士は皆和歌を口ずさんで、その忠

國學

君愛國心を吐露した。

かくして、皇室は道德の本源であらせられたばかりで無く、又風流文雅の中心であらせられたのである。文藝ばかりでは無く、音樂、禮儀、一切の有職の淵源であつたのである。兵馬の權が武門に移つて後も、一切の名譽、光榮の中心は朝家にあつたのである。

武家時代に生れた人々も皆みやびの心をもつて、朝家を仰ぎ、古代に憧憬したのである。みやびは「宮びで、宮中のふりといふ意義である。

風流文雅の中心

宮び

〔一〕 君臣の歌

後鳥羽天皇

夜を寒み圍の衾のさゆるにも

わらやの風をおもひこそやれ

龜山天皇

岩清水たえぬ流は身に受けつ

わが世のすゑを神にまかせん

後宇多天皇

いとゞまた民安かれと祈るかな

わが身世に立つ年の始は

後醍醐天皇

世をさまり民安かれと祈るこそ

わが身に盡きぬ思なりけれ

後村上天皇

高御座とばりかゝげて樞原の

みやの昔もしるき春かな

海犬養宿禰岡磨

御民われ生けるしるしあり天地の

さかゆる時にあへらく思へば

源 俊 頼

千年もと御代をばさゝじ敷島や

やまと島根の動きなれば

荷 田 春 満

あふがばや星の林もわが君の

八百萬代のかずにかぞへて

本 居 宣 長

もの皆はかけりゆけどもあきつ神

我が大君の御代はとこしへ

足 代 弘 訓

天つ神國つ社はあまたあれど  
きみを千年と祈らぬはなし

一一二 列聖の御撰述

列聖が文事に御心を留めさせられたことは、代に勅撰集のあつた事からでも明らかであるが、御撰述の書もなかく多い。多くは寫本のまゝに傳はつたもので、或は火災により、或はしみのすみかとなつて、佚亡したのも少くないが、學者の研究によつて、今日まで書名の知られて居るのは、嵯

峨天皇から孝明天皇まで五十三朝にわたつて、二百三十六種といふ多數に上つてゐる。その中には禁中の故實作法、年中行事、日中行事等をお記しになつたものもあり、訓戒を書いて御子孫の爲にお遺しになつたものもある。御日記、御記録の類も多數であつて、これ等は皆後の天皇の御參考になるものである。管絃、蹴鞠、薰香などの雜技に關したのものもある。佛教に關するものも、儒教に關するものもあるが、就中最も多いのは文學に關するもので、それは百五十一種もある。その中でも和歌に關す

後鳥羽天皇

るものが最も多くて、百五十一種の中の百二十六種までも占めて居る。之を以ても、列聖が如何に文學を嗜ませられ、又如何に敷島の道に趣味を持たせられて居つたか、分る。承久の役に隱岐に御遷幸あつた後鳥羽天皇は、和歌には殊に御堪能で、隱岐におはしてから後も、和歌についてくさくさの御撰述があつた。後陽成天皇、後水尾天皇、後西院天皇、靈元天皇は伊勢物語や源氏物語などの古物語に就いての御研究、御撰述もあつたのである。

後水尾天皇

順徳天皇

後深草天皇

御撰述の最も多いのは後水尾天皇で、五十三種の御著述がある。後鳥羽天皇は十八種、順徳天皇は十二種ある。順徳天皇の禁秘御抄と八雲御抄を拜讀し奉れば、その中に御引用になつた和漢古今の書物が、如何にも多數で、その御博覽、御多識を推察し奉ることが出来る。最も浩瀚な御撰述は後深草天皇の御記で、これは百卷以上もある。歴代天皇がかく學問の道にいそまれたことは、亦世界に類例の無いことである。その中には聖訓を後世に垂れさせられたのもあり、學問の研究

に一段の便利を加へさせられたのもある。殊に御日記類を見れば、いづれの御代としても、國を思ひ、民を思ふ大御心の窺はれないものは無い。

### 一三 明治天皇

道德禮儀の本源であり、文雅風流の中心であり、絶えず仁慈の政を施され、幕府が政權を握つて居て、直接御政治を執らせられぬ時世に於ても、常に祖宗の御心を御心としてお忘れにならなかつた皇室の稜威の光は、明治の王政復古とともに、限な

く幾千萬の國民の上を照すに至つた。申すも恐多い次第であるが、明治天皇の偉大な御性格は、歴代の聖徳を御一身に集めて御立ちになつたのであつた。永い間古代に憧憬した國民にとつては、長雨の後に再び天日の光を仰ぐ心地がした。

明治天皇の聖徳大業は今更申すまでも無い。今日の日本の國運の發展が明らかに之を物語つて居る。天皇が大風、大水、地震、火災等のある毎に、民の疾苦を思し召して、いつも内帑の金を下し賜はつたことは、年として無かつた事は無い。日清戦役後、



臺灣人の感泣

臺灣が我が版圖に歸して後、同じやうな御惠が新附の臺灣人にも及んだ。臺灣人は感泣して、かくの如きことは聖王の昔にあつたとばかり聞及んだ。今まのあたりこの天恩に浴することは實に夢のやうである。と言つたさうである。

明治四十四年施藥救療の詔を下されて、金百五十萬圓を御下賜になつて、こゝに始めて恩賜財團濟生會の設立を見るに至つたのも、畏い次第である。さうして其の御居間にはストーブも無く、獅子の皮の敷物は犬の革でお繕ひになつてあつたと

いふでは無いか。桂公爵が内閣總理大臣の辭職を乞ひ奉つた時、卿は辭職する時あつても、朕は辭職する時が無いぞ。と仰せられたと承つて、誰か感泣しないものがあらう。

明治天皇が和歌に堪能でいらせられた事も御歷代中で比較が少い。政務御多端の御暇に、御詠出になつた御製は二十萬首に上つて居るといふ。眞に古今獨歩であらせられる。

國民のことばの花を我が窓に

つどへて見るが嬉しかりけり

新年の御歌を召させられる大御心でも如何に和歌を愛でさせられたかが拜察せられる。

うけつぎし國の柱のうごきなく

榮えゆく世をなほいのるかな

曉のねざめしづかにおもふかな

わがまつりごと如何あらんと

おのがじし力盡して世を富ます

民こそ國のたからなりけれ

千萬の民とともに楽しむに

ます樂みはあらじとぞおもふ

等の御製に、國家人民を思はせ給ふ大御心を知り奉り、

我が國は神の末なり神まつる

むかしのてぶり忘るなよゆめ

國のためいよく盡せ千萬の

たみのこゝろを一つにはして

差上る朝日の如くさわやかに

もたまほしきは心なりけり

よきを採り悪しきをすて、外國に

劣らぬ國となすよしもがな

いそのかみ古きためしを尋ねつゝ

新しき世のこともさだめん

皆國民にとつての御教訓である。

農民をあはれませ給ひては、

あつしとも言はれざりけり煮返る

水田に立てるしづせおもへば

子等はみな軍の庭に出でては、

おきなやひとり山田もるらん

出征軍人をおもひやらせ給ひては、

はしゐして月見るほども戦の

庭のありさまおもひやりつゝ

御多端の御政務においそしみになつては、

年々におもひやれども山水を

くみて遊ばん夏なかりけり

と仰せられたのである。かくの如き大御心、かくの

如き御仁慈、何時何處にその例があらうか。我が列

聖は皆この大御心であらせられたのである。

今上陛下

今上天皇陛下が列聖の大御心を大御心として、

先帝の遺業を更に恢弘しようとお務めになつて

いらせられることは、臣民がまのあたり見奉つて、

感佩してやまぬ所である。大正七年の夏、米價騰貴の爲、貧民の困苦することを軫念遊ばされて、金三百萬圓を下し賜はつたことは、今に始めぬ皇室の御仁慈、唯感泣の外は無いのである。

一四 萬民を綏撫し給ふこと

久米幹文

萬民は皇祖天神の授けたまふ所にして、國の寶なる故に、御代々綏撫したまへる趣は、至らざる所なし。さて仁徳天皇御位の初め、高臺に登りて、民煙

の稀なるを御覽し歎かせたまひて、三年の徭役を免じたまひしかば、宮殿破れても繕ひたまはず、衣食弊え餒れても改めたまはず、ひたすらに御心を責めて神祇に祈りたまひしかば、天神地祇頻りに感じたまひ、風雨も順に、五穀大いに熟りて、三年の間、百姓富み榮えたり。さて民の願に依りて、新に宮殿を造りたまひしに、民等老を扶け、幼を携へて、日夜競ひ造りしかば、幾程もなく成りにけり。尙また諸國の水害を除き、堤堰を築き、池沼を穿り、屯倉を設け、農桑を勧めたまひしかば、萬民仰ぎ奉り

て、聖帝と稱へ奉り、又元明天皇の勅に、皇祖の御世世、此の食國をさくにを撫てたまひ慈あやみたまふことは、親の己が兒を養ふことの如く、治めたまひ惠あまみたまひ來る業なり。」と宣りたまひ、又醍醐天皇は深く民の艱苦を察したまふ餘りに、甚だ寒き夜には御衣を脱ぎて、夜の御殿より出したまひしかば、怪あやしみて問ひ奉りければ、賤民等はさぞ寒からんを。」と宣りたまひ、又一條天皇も同じ様に、寒夜は御衣を押し除けたまひて、貧民の寒からんに、朕ひとり暖かに寢んは無慚なり。」と宣りたまへるなどを以て、御代々

の聖意を察し奉るべし。かくて天皇親ら齋戒して、天神地祇を祭らせたまひて、陰陽を調へ、風雨を順にし、才能に任じて善制良法を施したまふも、皆天皇の天職を奉じ、萬民を平けく治めたまはんの聖業に非ざるは無し。さて其の善制の概略は如何といふに、先づ國司に命めいせて、春毎に管内を巡行して民の冤枉を察し、政刑の得失を考へて、其の患苦を問はしめ、農桑を勧め、五教を布きて、好學、篤實、孝悌、忠信の郷閭に聞ゆる者は舉げて朝廷に進め、門閭かどに表あらわし、また不孝、不悌にして、禮儀を亂り、法令に従

はざる者を糺彈し、八十以上の老者には保養の侍者を附け、三子以上を産める者には乳母を給ひ、義倉を設け、常平倉を置きて、貧民を濟ひ、凶年に備へ、國毎に學校を建て、人才を教育し、鰥、寡、孤、獨、貧窮、老疾等の、自ら存へ難き者は近親をして收め養はしめ、もし近親なきときは、其の坊里につきて濟はしめたまひしかば、萬民の天朝を仰ぎ奉ること、赤子の父母を慕ふが如くなりけり。

一五 國民の至情

昔は九重雲深くいらせられて、天顔を拜することなどは思ひもよらなかつた。今はをちこちの行幸、臨幸等に國民は面り現つ神を拜むことが出来る。父老はその畏さに涙を落すのである。我が國民が皇室に對し奉る崇敬は、祖先の血と共に我等に傳はつて來たもので、外から教へられたものではない。何等の教育を受けないものも、皇室の尊いことを知り、天皇を神として仰ぐことを知つてゐる。ましていくらかの書物を讀んで、建國の由來を知り、歴代の御仁慈の御事蹟を知つてゐるものは、尙

更感泣の情に堪へない。それと同時に、忠君愛國の心は油然として湧くのである。

外國の書物を読み、外國の歴史の一言をも學んだものは、尙更彼我の異なる事を知つて、彼の國の歴史に戰慄し、我が國に生れ出た事の幸福を思はなければならぬ。然るに我が國に生れて我が國の事を知らず、往々彼の國の人の説に心を動かされて、祖先の心を忘れるものがあるのは、目に一丁字の無い無教育者にも劣ることとて、かくてはむしろ學ばざるに如かないのである。

外國の書を読むこと

敷島のやまと心を種として

よめや人々から國のふみ

といふのや、

蟹文字を読み書きすとも我が國の

みちよこさまに踏みなたがへそ

といふのはこれ等の徒を戒めた歌である。

一 我が皇室と人民は開闢以來、建國以來、上より蒙る慈愛と、下より捧げる崇敬で相和して居るので、一たびも上が下を虐げたり、下が上を恨んだりしたことは無い。言皇室に及べば、涙まづ下るのが國

民の心である。この心の決して衰へて居らぬ事は、明治天皇御大患の節、全國の民が、天を仰ぎ地にひれふして、御快癒を祈つたのでも知れる。其の時の二重橋前の夜の光景の如きは實に物凄い程であつた。英國のロンドン・タイムスに崩御の夜のさまを記して、

外國新聞の記

此の夜も、宮城の前は陛下の御平癒を熱禱する數萬の群集を以て埋められた。しかも儼然たる秩序が保たれて、木履の砂利を噛む音と、低き祈禱の聲の外には、何等の雜音も無かつた。一人の

少女が緑髪を斷つて御平癒を祈願したといふ報道が、やがて此の際に於けるすべての日本人の情緒を語るものである。かつて外人間には、日本人の天皇崇拜は一種の形式に過ぎぬといふ議論があつたが、宮城前に於けるこの俛首熱禱する人の海を瞥見した人は、蓋し思半ばに過ぎるものがあらう。その人の海の中には多數の基督教徒も交つてゐた。

伏見宮殿下

と言つてゐる。當時新聞、雜誌等にあらはれた寫眞の中に、伏見宮殿下が御手で目をおさへて宮門を



退出せられるのを撮つたのがあつた。この國民の至情の發露した有様を御覽あつて、覺えず感涙を催されたのであらうと拜察する。父母を喪するが如し。と言つたのは支那の譬喩であるが、日本ではこれが實事である。この至情は我等が祖先から相繼いで來たのである。

### 一六 乃木大將

殉死

明治天皇大葬の夕、輜車御發引の號砲を聞いて、乃木大將は夫人靜子と共に、東京赤坂の自邸に自

刃して果てた。大葬の式場に參列した人々は、その歸途に於て、早くも之を報知する號外に接した。號外の代價をも受取らずして、いち早くかけて行く號外賣もあつた。電報は各地に飛んで、國の内外ともに驚いた。明治天皇の崩御を悲しんだ國民は、又別の哀愁を添へられた。大將の心根を察して、誰も泣かぬものは無かつた。自殺を野蠻の遺習として擯斥する西洋の新聞紙の多くも、大將を古武士の典型と稱讚した。

生立

大將は謹嚴な武士を父として、嚴格な武士道的

教育を受けた人であつた。赤穂義士岡島八十右衛門、武林唯七等十人がお預けになつて、後自刃した毛利邸内に生れ、吉田松陰に私淑し、又山鹿素行を景仰した人であつた。

家庭の教育から忍耐、刻苦の習慣を積んで、極めて質素儉約の人であつた。古の武士の理想とした正直、誠實、廉潔を體得して、常に實踐躬行した人であつた。大將は佐々木源氏の後で、佐々木盛綱、高綱等は其の祖先であるが、祖先よりも數等上の人格を有してゐた。祖先のやうに、武勇にのみ熱心で功

實踐躬行

文雅風流

名にのみ急な人では無かつた。大將は學問を好んで、喜んで先哲の書を読み、文雅風流の道にも長けて、詩や歌を作つた。不徳の者を憎むこと蛇蝎の如く、正義の一本道を進んで行く人であつた。古武士のやうにせまい見地にゐた人では無くして、文明的教育もあり、識見もある人であつた。忠君愛國の念は燃えるやうに盛で、死を見ることを鴻毛よりも輕んじた人であつた。旅順の包圍攻撃に不撓不屈の努力を以て遂に之を陥れた。大將の二子はその攻圍中に戦死したが、長子の死んだ時、夫人靜子

夫人への電報

へ宛て、

カツスケシンドマンゾクス

といふ電報を打つた人であつた。父子三人の戦死するまでは葬式を営むなど、夫人に命じた人であつた。しかも大將は無事に凱旋した。陛下の多数の軍人を死なせたといふのを慚愧して、

皇師百萬征強虜。野戦攻城屍作山。

愧我何顔看父老。凱歌今日幾人還。

と歌つた人であつた。明治天皇の

いさをある人を教の親として

おふし立てなん大和なでしこ

の御製は、明治天皇が大將の人格をお認めになつて、學習院長に任せられた時の御歌であると承つてある。

この人格の高潔な人、勳功の高い人が、深く天皇の聖恩に感じ、周密に後事を處理して、夫人とともに殉死を熟慮斷行したのである。大將の心事を知るものは皆大將に同情した。大將の心は實に我が國民の心を代表したものである。

大將は古武士の典型たるばかりでは無い。現代

日本人の模範である。我等は大將の傳記を読み、大將の一言一行を規矩として自己の修養に心がけねばならぬ。さうして永く其の義烈をしのばなければならぬ。大將の如き人は日本國より外には生れぬのである。

〔一七〕 富國強兵に就いて

乃木 希典

軍隊教育は體力の強健と、勇氣と、忍耐とをもとより必要とするが、特に其の精神の進歩といふものを最も必要とする。軍隊には國民の精力の度合

以上の事を求める事は不可能である。それ故、國民の精神が進んで來なければ、軍隊も強くなれまい。國民の精神が奮つて來れば、それ相當の發達はするのである。ところが、軍隊の教育をするにも金が必要であるから、いづれにしても、國の富力が無ければ目的を達することが出來ない。併し精神の教育ばかりは別の手段を要するので、如何に富があつても、これだけはだめである。近頃三年の兵役を二年としたのは、各種の事業に勤める人の爲にしたのであるから、其の人々が其の心で勤めれば、三

分の一に當る富を加へる事は出来る筈である。これは無理な望であるかも知れぬが、然し幾分か富を増さねばならない筈である。我等は富に於ても、外國に負けないうにせねばならない。而して富まさうとするには、先づ濫費するといふことを防がなければならぬ。此の濫費の結果は、柔惰淫逸等の弊風を起すものである。これではいくら富まさうとしても、底抜けの桶に水を入れる様なもので、根源に力を失つてしまふものである。

此の濫費といふことは、多く上流社會に行はれ

る。下等社會には行はれた所で、瑣細なものであらう。上流社會の人が奢侈淫逸の風を示したなら、それは悪い方に世間の人を誘導するのである。世間に對しては、口では勤儉をいつて居ても、自分は實行しないのが多い。試みに身體に着けて居るものを見るに、非常に奢つてゐる。日本で製造したもので濟むものを、これは巴里で出来たものであるとか、これは倫敦で作つたものであるとかいつて、外國のものを好み、無闇と黄金寶石を喜んで居る。かかる次第で、口と行が大分違つてゐることが多い。

今の日本の状態といふものは、随分困難が多いのであるのに、此等の悪い風に流れて行くと、書く事や、言ふ事が、どんなにりつげに出来ても、精神上の衰頽を來たすやうになるのであるから、誠に心配な事である。外國人の評に、今までの日本は、昔の習慣と、英邁なる天皇の御威徳に因つて保つてゐるが、歐羅巴の風に感化されていつたならば、たとひ、發達する點はあるにもせよ、費す所の金に苦しんで、日本固有の忠孝の精神が或は次第に消耗する結果となりはすまいか。といつてゐる。如何にも腹

の立つ言分であるが、かゝる批評のある事を決して忘れてはならぬ。現在日本は強國の位置に入つて盛なものであるが、之を頼みにして安心してゐると、大きな間違が起つて來るであらう。

### 一八 國文學と皇室

國民の思想感情は、最もよく其の國の文學にあらはれる。列聖の御製に常に國民をおもふ御歌の多いのと同時に、國民の歌には常に大君を思ふ心が歌はれてゐる。上下三千年の文學、雅俗の種類を

問はず、皇室をのろひ皇室を誹つた文學は一つも見えぬ。武家時代に發生した文學でも、決して幕府を謳歌しない。最も著しい一例として謠曲の文を舉げよう。謠曲は室町將軍時代の產物で、將軍保護の下に發達したものであるが、

四海波しづかにて、國もをさまる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや。あひに相生の松こそめでたかりけれ。げにや仰ぎても、ことも愚かやかゝる世に、すめる民とて豊かなる、君の惠ぞありがたき。(高砂)

それ天長く地久しくして、神代の風のどかに傳はり、皇すめらみのかしこき御代の道廣く、國を惠み民を撫でて、四方に治る八洲やまとの波、靜に照す目の本の影ゆたかなる時とかや。(難波)

四つの海波しづかなる時なれや、八洲の雲もをさまりて、げに九重の道すがら、往來ゆきの旅もゆたかにて、めぐる日數も南なる、八幡山にも着きにけり。(弓八幡)

げに今とても神の代の、ちかひは盡きぬしるしとて、神と君との御めぐみ、誠なりけりあり

がたや。(岩船)

ありがたや、君としてだにか程まで、敬ひたまふ御神の御威光の程こそありがたけれ。賤しきあまの此の身までも、すぐなる御代にあふみの海の深き恵をたのむなり。(白髭)

君と神との道すぐに、治る國ぞ久しき。(同)

いつも皇室の御恵を讚美し、國體を謳歌してゐるのである。謠曲のみならず、徳川時代にはあらはれた淨瑠璃にも、小説にも、俗謠にも、皇室を非議したものは一つも見えぬ。國民が皇室に對する崇敬心は之によつても知られるでは無いか。

一九

物のあはれ

本居 宣長

物のあはれを知るといふ事。まづすべてあはれといふは、もと見るもの、聞くもの、觸るゝ事に心の感じて出る歎息の聲にて、今の俗言にも、ああとといひ、はれといふ是なり。(中略)古の歌にあはれとよめる「ひとつ松あはれ。」あはれその鳥。「あはれ幾よの宿なれや。」あはれいにしへありきてふ。などの類は、感じて直ちに、あはれと歎きたる儘をいへるにて、



此の詞の本なり。あはれあはれとなげきあまり。あはれあなうと過しつるかな。などの類も同じ。あはれてふ言をあまたにやらじとや、春におくれてひとり咲くらん。といふ歌も、人の花を見て感じて、あはれといふ詞を、その花の心に、ほかのあまたの花には分けやらずして、おのれひとりしかいはれんと思ひてや、他の花の皆散りて後に、ひとり後れては咲きぬらんと詠めるなり。これらをもて、まづあはれといふ詞の本を知るべし。さて又「あはれと見る。」あはれと聞く。「あはれと思ふ。」などいふたぐひ

は、いさゝか轉じたるいひざまにて、これはあはれと感して、見聞き思ふなり。又あはれなりといふたぐひは、あはれと感ぜらるゝよしなり。又あはれを知る。「あはれを見ず。」あはれにたへず。などいふ類は、すべて何事にまれ、あはれと感ぜらるゝさまを名づけて、あはれといふ物にしていへるにて、必ずあはれと感ずべき事にあたりては、その感ずべき心ばへをわきまへ知りて感ずるを、あはれを知るとはいふなり。又物をあはれぶといふ言も、もとあはれと感ずることなり。古今集の序に、霞

をあはれび」とあるなどをもて知るべし。又後の世には、あはれといふに、「哀」の字を書きて、たゞ悲哀の意とのみ思ふめれど、あはれは悲哀にかぎらず、うれしきにも、おもしろきにも、たのしきにも、をかしきにも、すべてあはれと思はるゝは、皆あはれなり。されば、あはれにをかく。とも、あはれにうれしく。ともつらねていへり。そはあはれにも、うれしきにも、あはれと感したるを、あはれにとはいへるなり。但し又をかしき、うれしきなどと、あはれとを對へていへることも多かるは、人の情さまづくに

感ずる中に、うれしきこと、おもしろきことなどには、感ずること深からず、たゞかなしきこと、うきことなど、すべて心に思ふにかなはぬすぢには、感ずることこよなく深きわざなるがゆゑに、しか深き方をとりわきても、あはれといへるなり。俗に悲哀をのみいふも、その心ばへなり。さてまた物に感ずとは、俗にはたゞよき事にのみいふめれども、これも然らず。字書にも、「感は動也」といひて、心の動くことなれば、よき事にまれ、あしき事にまれ、心の動きで、あはれと思はるゝは、皆感ずるにて、あはれと

いふ詞によく當れる文字なり。漢文に「感鬼神」と有りて、古今集の眞名序にも、しか書かれたるを、かな序には、「おに神をもあはれと思はせ」と書かれたるにて、あはれは物に感ずることなるを知るべし。大かたあはれといふ言の本、またうつりて使ひたるやうなど、上件にて心得べし。かくて又物のあはれといふも同じことにて、物といふは、「言ふ」を「物いふ」かたる。を物語る。又物まうて。物見。物いみ。などいふたぐひの物にて、ひろくいふ時に添へることばなり。さて人は何事にまれ、感ずべきことにあたりて

感ずべき心を知りて感ずるを、ものあはれを知るとはいふを、必ず感ずべき事にふれても心うごかず、感ずること無きを、物のあはれを知らずといひ、心無き人とはいふなり。ものわきまへ心ある人は、感ずべきことには自ら感ぜではあらぬわざなるに、さもあらぬは何とも思ひわくかた無くて、必ず感ずべき心を知らねばぞかし。後撰集に、ある所にて、すのまへに彼是物語し侍りけるを聞きて内より女の聲にて、あやしうものあはれ知り顔なるおきなか。といふをきゝて、貫之、あはれてふ言

にしるしは無けれども、いはではえこそあらぬものなれ。此の歌の意、あはれといひて歎きたりとして、そのかひは無けれども、感ずべき事にふれて、たへがたくて、しかなげかではえあらぬものぞとなり。物のあはれを知る人は、何につけてもかくの如し。

二〇 やまと心

やまと心を説いた人は少く無い。やまと心を武士道の道德と同じやうに説く人もある。中には武勇一偏の敵愾心と思つて居る人もある。余はこゝ

に余がやまと心の解釋を述べよう。

「やまとたましひ」といふ語は、古くは世才の意味に用ひられた。和魂漢才の和魂はそれで、漢才即ち學問の才と比べて、世才むしろ常識の意味に用ひられた。後世ではやゝ其の意義が變つて、日本人特殊の心情といふ意味になつた。本居大人の

敷島のやまと心を人間は、

あさひに匂ふ山ざくら花

のやまと心は、世才とか、常識とかいふ意味では無い。武勇一偏の意味でも無い。

正義

やまと心の一面は「明き淨き心」である。惟神の道で、祖先から會得して來た一すぢの正しい誠である。汚れない、穢れない、曲らない心である。自己の良心に少しの疚しい所の無い明々朗々たる心である。この心から一切の正義に向つて進んで行く勇氣を生ずるのである。苟くも正義の存する所、死ももとより厭はぬのである。古來の忠孝の心もこれであつて、武士道を一貫する精神もこれである。これは道德的方面である。

道德的方面

又の一面はみやびの心である。風流溫雅の心で

物のあはれ

ある。他の一面の善に執着するのに對すれば、これは美に執着するのである。宇宙間の美を理解する心である。いはゆる物のあはれを知るといふ心である。寛恕、慈愛、憐愍等のおもひやりの心は、之から自然に生ずるのである。武勇一偏まつしぐらに正義に向つて進む心の一面に、物のあはれを知る心があつて、始めて緩和せられるのである。この風流心が詩歌に發し、音樂に發し、又之を觀賞するの趣味となるのである。これは美的方面である。

美的方面

「明き淨き心」と「みやび心」と、この二つの方面が備

つてこそ本當のやまと心といはれるのであらうと思ふ。昔の武士が文武二道を心がけるのを理想としたのも之が爲である。平忠度や源義家の昔話を聞いて、景慕の情の自ら切なのも之が爲である。乃木大將はやまと心をもつた人の典型である。獨逸の軍人は勇悍無比であるといはれる。併し其の殘酷暴虐は人道の敵である。彼等はやまと心を持たぬからである。

宮中の御歌所では、新年毎に國民の詠歌を召される。國民が争うて奉る歌は四萬首、五萬首にも上

雛遊

るといふ皇室に對する忠義心、和歌に對する風流心、やまと心の發露はこゝにも認められる。百人一首の歌ガルタの流行もこの心の發露である。

三月三日の雛祭は美しい風流な遊である。これには宮中にかたどつて、美しい人形が列べられる。皇室を尊敬する心が、優美な人形遊にあらはれる。これもやまと心の發露である。さし上る朝日の光に美しい山櫻の咲匂ふ姿、本居大人の「やまと心の歌も、かく解すれば解し得られるとおもふ。花は櫻木、人は武士。」もこの意味に解

したいとおもふ。  
 我等日本人は太古より受継ぎ、歴史によつて養はれたこのやまと心を失つてはならぬ。世界に類の無い皇室と國民の美しい關係が、このやまと心を發生せしめたのである。

### 國民道德教科書卷三終

大正七年九月廿七日印  
 大正七年九月三十日發  
 大正七年十二月廿四日訂正再版印刷  
 大正七年十二月廿七日訂正再版發行

刷行

價定		(國民道德教科書)	
自卷二	卷一	自卷二	卷一
至卷五	各金參拾錢	至卷五	各金參拾錢
正大		正大	
年八	時臨	年八	時臨
至卷五	各金參拾錢	至卷五	各金參拾錢

著者 芳賀矢一

東京市神田區裏神保町九番地

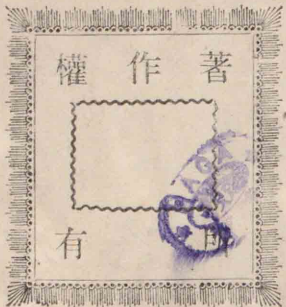
發行兼印刷者 富山房

合資會社富山房社長

代表者 坂本嘉治馬

東京市芝區愛宕町三丁目二番地

印刷所 東洋印刷株式會社



### 發行所

東京市神田區裏神保町九番地

合資會社 富山房  
 長電話本局一〇三六、本局四一三〇番  
 振替口座東京五〇一

